

「死のフーガ」成立までのツェラン

佐々木 博 康*

【要 旨】 「死のフーガ」を書いたドイツ系ユダヤ人パウル・ツェランは、当時ルーマニア領であったブコヴィナ地方の中心都市チェルノヴィッツに生まれた。第二次大戦中、彼の両親はトランスニストリアの強制収容所に送られそこで死んだ。ツェラン自身は強制移送を免れたが、強制労働に従事し続けなければならなかった。強制労働の合間をぬって彼は詩を書いた。「死のフーガ」には、両親を助けられなかったことを自分の罪と感じるツェランの個人的苦悩が色濃く反映している。

【キーワード】 ユダヤ人 強制収容所 チェルノヴィッツ ブコヴィナ

はじめに

筆者は、拙論「強制収容所の風景——パウル・ツェランの「死のフーガ」——」¹⁾において、パウル・ツェラン(1920-1970)の詩「死のフーガ」を取り上げ、その解釈を試みた。「死のフーガ」は凄惨極まる強制収容所の現実をテーマとしている。詩人にとって強制収容所を詩のテーマにしなければならないということは悲劇以外のなにもものでもないだろう。

このような詩をツェランが書くに至った背景にはどのような彼自身の体験があるのだろうか。ここでは主にハルフェン²⁾の記述を参考にして、第二次大戦当時のルーマニアの国情とチェルノヴィッツにおけるユダヤ人の状況を概観しつつ、それについて考察する。

ブコヴィナのユダヤ人

パウル・ツェランは、1920年11月30日、当時ルーマニア領であったブコヴィナ地方の中心都市チェルノヴィッツに生まれた。両親はドイツ語を母語とするユダヤ人であり、ツェランはドイツ系ユダヤ人である。

ブコヴィナ地方はヨーロッパの東の辺境にあり、現在では北部はウクライナに、南部はルーマニアに属している。チェルノヴィッツはウクライナ側にある。まずブコヴィナの歴史とそこでのユダヤ人の状況を見ておこう。

平成15年5月1日受理

* ささき・ひろやす, 大分大学教育福祉科学部独文学教室

オーストリアのハプスブルク家は、1774年モルダヴィアの北部を占領した。この地はオーストリアの統治下においてブコヴィナと呼ばれるようになった。当時ブコヴィナには、ウクライナ人、ルーマニア人、ユダヤ人、ドイツ人、それにポーランド人、ハンガリー人、フツルイ人、リポヴェン人、スロバキア人、チェコ人、アルメニア人、ジプシーなど多くの民族が居住していた。このうち北部の平野に住んでいたウクライナ人と、南部の山岳地帯に定住していたルーマニア人がそれぞれ全人口の3分の1を占めており、それに続くのがユダヤ人(12パーセント)とドイツ人(9パーセント)であった。他の民族はそれぞれ3パーセント以下であった。

オーストリアは最初この地域からユダヤ人を追放しようとしたのであるが、啓蒙専制君主であったヨーゼフ二世(在位1765-90)はそれを取りやめ、彼らを商人や職人として育成することで国家の利益を生み出させようとした。こうしてブコヴィナのユダヤ人たちは、150年近くに及ぶオーストリア統治の間、比較的平穩に暮らすことができたのである。

ブコヴィナが帝室直轄地となった1849年には、ユダヤ人とドイツ人は合わせて住民全体の3分の1になっていた。1867年、ユダヤ人は帝国市民と同等の権利を獲得する。ウクライナ人やルーマニア人が母語を捨てなかったのに対して、ユダヤ人が帝国の言語であるドイツ語を母語としていたからである。これ以降、第一次大戦に至るまでのおよそ半世紀はユダヤ人にとって黄金時代となる。1875年には、チェルノヴィッツにフランツ・ヨーゼフ大学が創設された。講義はドイツ語でなされ、世紀転換期頃には学生の3分の1がユダヤ人であった。ユダヤ人の大学教員もまれではなかった。20世紀の初めには、ユダヤ人が工場経営者、商人、銀行家としてこの地方の経済生活の指導的地位を占めていた。彼らはウクライナ人やルーマニア人以上に、それどころかドイツ人以上にオーストリアに対しては愛国的であった。

1918年、第一次世界大戦の敗北によりハプスブルク帝国(オーストリア=ハンガリー二重帝国)が崩壊し、ブコヴィナはルーマニア領となる。ルーマニアは同化政策をとり、ブコヴィナをルーマニアの州のひとつに変えようとした。ただ、少数民族それぞれの母語による学校の設立は認可したので、ユダヤ人の生徒に対しては以前と同じくドイツ語で授業が行われた。しかし、20年代の終わりには、少数民族の母語による学校はルーマニア語の学校に変えられてしまった。ツェランが卒業試験を受けたルーマニア語のギムナジウムも、もとはウクライナ語のギムナジウムであった。ユダヤ人たちはルーマニア支配下でもドイツ語を母語として守り、自分たちの市民権の尊重と、生活様式の保持のために戦い続けた。またあらゆる反ユダヤ主義に対して抵抗し続けた。しかし彼らがかつてハプスブルク帝国の中で持っていた重要な地位はもはや獲得できなくなってしまったのである。

ブコヴィナの中心都市チェルノヴィッツは、ツェランが生まれた当時ルーマニア領となっただけであった。町の全人口11万人のうちおよそ5万人がユダヤ人であり、彼らは街の中心部を占めていた。しかし、第二次世界大戦の進展とともにこの状況は大きく変わっていく。

1938年

1938年6月にチェルノヴィッツのギムナジウムを卒業したツェランは、両親の希望もあり、医学を学ぶためにフランスのトゥールの大学に入学する。チェルノヴィッツ大学には医学部はなかったし、ルーマニアの他の大学はユダヤ人に対しては入学制限を行っていた。すでにドイツに併合されていたオーストリアで学ぶことは不可能だった。フランスではルーマニアのギム

ナジウムの卒業資格（バカラウレアト）がバカロレアと同等であると認定されたので、同じような状況にあるルーマニアのユダヤ人はたいていフランスの大学に行ったのである。

1938年11月9日の朝、ツェランはチェルノヴィッツを發った。ポーランドを經由してベルリンに到着したのは、奇しくも「水晶の夜」が明けた11月10日であった。この夜にナチスとその突撃隊はドイツ全土でユダヤ人を襲撃した。7000以上のユダヤ人商店やデパート、ほとんど全てのシナゴーク（ユダヤ教会）が破壊され、91人のユダヤ人が虐殺された。

ツェランは、1963年に出版した詩集『誰でもない者の薔薇』における「コントルスカルプ広場」(La Contrescarpe) において、このときのことを次のように振り返っている。

クラカウを經由して
おまえはやってきた アンハルター
駅
おまえの目に飛び込んできたのは一条の煙
それは明日からの煙だった……³⁾

「アンハルター駅」はベルリンにある駅のひとつである。「明日からの煙」という言葉が示すように、ツェランは自身とユダヤ人のさらなる不吉な未来を実感させられたことであろう。彼は途中下車することなくドイツを通過した。ベルギーを經由して、パリについたのはその翌日のことだった。

1939年

1939年7月、ツェランは夏期休暇でチェルノヴィッツに戻る。しかし、9月1日にドイツ軍がポーランドに侵攻し、第二次大戦が勃発する。8月に締結された独ソ不可侵条約のためにドイツは心おきなくポーランドに軍を進めることができるようになったからである。

ルーマニアでは1938年2月以降、国王カロル二世(在位1930-40)が独裁体制を布いていた。彼はソ連を宿敵と見なして嫌悪する一方、ヒトラーに対しては畏敬の念を抱いていた。しかしルーマニアの存立が第一次大戦後のヴェルサイユ体制に依存している⁴⁾ことを感知していたカロル二世は、それを崩壊させるドイツに与するわけにはいかなかった。ルーマニアは中立宣言を發し、中立政策を維持しようと試みる。

このような状況の中で、ツェランが再びフランスに戻ることはもはや不可能だった。彼はチェルノヴィッツ大学でフランス文学を専攻する。同じようにフランスで医学を学んでいた者は医学から遠ざからないために自然科学系の学問を専攻したのであるが、ツェランはそうしなかった。フランスでの一年の勉強において自分が本当に求めるものが文学であることを知ったのである。

1940年

1940年6月14日のパリ陥落から間もない6月20日、チェルノヴィッツにソ連軍が進攻してくる。ルーマニア人はその直前に逃走していた。

すでに独ソ不可侵条約によって、ソ連はドイツとの間でルーマニアのベッサラビア地方⁵⁾でのソ連の権益を取り決めていた。しかしソ連はベッサラビアだけでなく、北ブコヴィナをも占領した。北ブコヴィナの住民の過半数がウクライナ人だったからである。ソ連はドイツに両地域を併合することを伝えた。ソ連からの最後通牒によって譲渡を求められたルーマニア政府は、ドイツとイタリアからの勧告もあり、譲歩せざるを得なかった。チェルノヴィッツを含む北ブコヴィナはソ連邦ウクライナ共和国の一部となった。

窮地に立ったカロル二世はドイツの側につくことでソ連と対抗しようとする。7月、国際連盟を脱退する。国内ではファシストの諸制度が取り入れられ、政党は「国民党」一党のみとなる。ところがドイツとイタリアの圧力でルーマニアはさらなる譲歩を求められる。こうして8月にはトランシルバニア北部をハンガリーに、9月にはドブロジャ南部をブルガリアに割譲した。

1940年9月、カロル二世は、反ソビエトでヒトラーの信任の厚いイオン・アントネスク将軍に助けを求めた。アントネスクはドイツの支持の下、すでに人望を失っていたカロル二世に退位を迫った。カロル二世が亡命し、彼の息子ミハイ（在位1927-30, 40-47）が国王となると同時に、親ナチスのアントネスク独裁体制が確立する。10月にはドイツ軍の駐留を認めた。ドイツはルーマニアが自分のなわばりであることをソ連に印象づけることになる。11月、ルーマニアは日独伊三国協定に加盟した。アントネスクの独裁体制は1944年8月まで続くことになる。

ソ連軍の進攻によってチェルノヴィッツ大学は一時閉鎖された。ツェランは夏期休暇の間にロシア語の勉強を始める。9月に大学が再開されるが、ウクライナ・ロシアの大学となったため、ロシア語とウクライナ語の習得が不可欠となる。かつてはドイツ語の大学であったが、1918年からはルーマニア語の大学となり、今やウクライナ・ロシアの大学となったのである。教員のほとんどはソ連国内から送り込まれてきた者たちで、大学で教える資格を持った者はいなかったため、大学の講義のレベルは著しく低下した。ただ、ソ連国内と同様に大学生にも労働者と同額の給与が支給されたことはツェランを喜ばせた。

1941年

1941年6月22日、ドイツはソ連との不可侵条約を破り、バルト海から黒海に至る1600キロの戦線で一斉にソビエト領内に進撃を開始する。ここに独ソ戦が始まる。ルーマニアも同日ソ連に対して宣戦を布告した。

それに先立つ6月13日、チェルノヴィッツやその近隣では、ドイツ軍の攻撃を予感していたソビエト国家警察NKWDが一晩のうちに4000人に及ぶ老若男女をシベリア送りにした。以前からブルジョア的、資本主義的、トロツキスト的などとしてブラックリストに載せられていた者たちとその家族である。チェルノヴィッツの上層を形成していたのはユダヤ人だったので、強制移送させられた者の四分の三がユダヤ人だったという。

ルーマニア軍とドイツ軍に攻められたソ連軍は数日でブコヴィナから退却する。ソ連軍の撤退に際して、住民たちには避難勧告、学生には避難命令が出された。ある者はナチスの危険を主張し、ある者はドイツが文化国家であることに期待を寄せた。チェルノヴィッツを離れることを決めた者はごく少数だったが、そのなかにはツェランの親しい友人たちもいた。ツェランは街に残ることを決めた。彼の恋人であるルートはナチスの支配がいずれ終わりを告げると考

え、彼の行動を支持した。ツェランにはまだ「詩人と思想家」の国であるドイツに対する信頼が残っていたのである。

7月5日、ルーマニア軍がチェルノヴィッツに進攻してくる。ソビエトに協力した罪を問われ、ユダヤ人やウクライナ人が殺害される。翌6日には、ナチス親衛隊（SS）の特別行動隊Dが到着する。オットー・オーレンドルフ司令官率いる特別行動隊Dの任務は、すべてのソ連人民委員とユダヤ人の抹殺であった。

ユダヤ教の大神殿が焼き払われ、聖職者たちが殺害された。ルーマニアの軍と警察はドイツ人を手伝った。

抹殺は組織的に行われた——まず逮捕、そしてしばしば夜を徹して行なわれた、事実上の苦しい拷問にすぎない尋問が続き、明け方には頸部に銃弾を撃ち込まれて射殺された。ブルート川の河原に、犠牲者たちは自分たちの手で、みずからの墓穴を掘らなければならなかったのである。3日のうちに682人のユダヤ人が殺害され、8月末までには3,000人を越えた。それをオーレンドルフは誇らしげにベルリンに報告したのである。⁶⁾

生き残った者は、市民権を失い、衣服に黄色いダビデの星をつけることを義務づけられ、強制労働にかり出された。

10月11日、この地で初めてのゲッターが作られる。45,000人のユダヤ人が持てるだけの食糧と財産を手を、高い板塀と有刺鉄線で囲われた狭苦しいゲッターに移った。ゲッター外のユダヤ人住居は封印され、国家所有となった。

ゲッターからはある一定の人数ごとに、ドニエストル川とブーク川の間にあるトランスニストリアの収容所に送られた。強制移送された人々の中には、自分たちが他の民族から隔離されて自治を認められるのだと考える者もいた。歴史を回顧する場合と異なり、動乱の渦中にある人々には自分の置かれた状況はわからないものである。

この間、ツェランは、強制労働にかり出されていた。爆破されたブルート川鉄橋の瓦礫や郵便局の残骸を片づけねばならなかった。肉体の疲労は極に達し、飢えに苦しめられた。精神的には放心状態が続いていた。

やがて、一時的に状況が改善され、街の生活に必要な仕事をするために15,000人のユダヤ人には滞留許可が発効された。また、ユダヤ人に好意的だったチェルノヴィッツのルーマニア人市長ポポヴィッチの努力によって強制移送が中断された。秋には、パウルの家族も滞在許可を得て自宅に戻ることができた。ゲッターは解消された。

1942年

1942年6月、ルーマニア人のプロコヴィナ軍事司令官の命によって強制移送が再開された。今度はポポヴィッチの許可証を持っている人が対象となった。ユダヤ人たちは、ゲシュタポと地区の警官によって夜ベッドからたたき起こされ、数分以内で手荷物を整えるように言われ、トラックで駅に運ばれた。そこから家畜運搬用の貨車で移送された。

6月6日と13日の土曜の夜にそのような手配が行われたので、ユダヤ人たちは土曜の夜には、より安全な身分証明書を所持している親戚や知人の許に身を隠すようになった。ツェラン

の家族も同様だった。

6月27日のことである。ツェランは、恋人ルート・ラックナーの助けで、ルーマニア人の経営する化粧品工場に隠れ家を見つけていた。彼は両親と一緒にそこに来るように懇願した。しかし、彼の母はかくまってもらうことに疲れてしまっていた。「人間は運命を避けることはできない。トランスニストリアでもすでに多くのユダヤ人が生活しているのだから」⁷⁾と言って、家にとどまることを決めたのである。彼女はトランスニストリアに追放されたユダヤ人の3分の2がすでに死んでしまったことを知らなかったのである。ツェランは母の運命論を激しく非難した。おそらく生まれて初めて母と深刻な争いをした。父とも諍いになった。

外出禁止の時刻が迫ってきたとき、パウルは両親の同意を得ることなく、行動に踏み切った。彼は一人で家を出たのである。両親が自分の後を追って隠れ家にやってきてくれると信じていた。ところが彼らはこなかった。そして翌朝早く家に戻ってみると、玄関はすでに封印されていたのである。両親は連れ去られ、移送隊はチェルノヴィッツをとうに出発していた。⁸⁾

この夜の自分の行動をツェランは生涯悔いることになる。

トランスニストリアは、ウクライナのドニエストル川の東にあった。そこはベッサラビアやブコヴィナのユダヤ人たちの一大収容地となっていた。ツェランの両親は、夏の暑さの中、家畜運搬用の貨車に詰め込まれて数日間運ばれた。南ブーク川西岸のラデジンの収容所で、ナチス親衛隊とウクライナ人の見張りから残酷な扱いを受けながら、道路や石切場で過酷な強制労働に従事した。「靴をなくした者は、仕事ができなくなった者とみなされ、即座に射殺され」⁹⁾のような状況であった。後に両親はミハイロフカ村に移送され、父親はさらにハイシンへと移された。

7月に強制移送は中止となり、ユダヤ人男性には強制労働が課せられることになった。ツェランはチェルノヴィッツから南に400キロ離れたモルドヴァ近郊の村タバレスシュティの強制労働収容所に送られ、大勢のユダヤ人たちとともに道路工事に従事した。鋤とシャベルを使って日の出から日の入りまで働いた。食事として与えられたのは、一杯のトウモロコシスープだけである。休暇でチェルノヴィッツに戻ってきたとき、収容所で何をしているのかと尋ねられたツェランはただ一言、「穴掘りさ(Schaufeln!)」と答えた。彼はすっかり無口になってしまった。

この時期のツェランの心境はルートに宛てた手紙からわずかにかいま見ることができる。タバレスシュティからの最初の手紙でツェランは次のように書いている。

絶望しないようにと君は書いてきたね。いや、ルート、ほくは絶望していない。でも母がかわいそうだ。最近はとても病気がちだったからね。きっといつもほくが元気かどうか考えているよ。あんなふうに別れも告げずにほくは去ってしまった。おそらく永遠に。¹⁰⁾

しかしまた、8月2日の手紙には、次のような文章も見られる。

ほくは、自分の手の中で人生が非常な苦しみに変わってしまったのを見た。でもそれは最後には人間的なものに変わったんだ。この人間的なものはほくに一つの道を示してくれ

た。ぼくはかつてその道を歩もうと試みまし、これからもその道を歩いていこう。まっすぐに、確信をもって。¹¹⁾

「一つの道」とは、詩人として生きる道のことである。ツェランは奈落の底で再び詩によりどころを見出す。日曜になって仕事が休みになると、彼は詩を書いて恋人のルートに送ったのである。

1943年

1942年から43年始めにかけてツェランは悲しい知らせを立て続けに受け取る。42年の秋に、使いの者が密かに運んだ収容所からの母の唯一の手紙で彼は父の死を知る。射殺されたのか、あるいはチフスで死亡したのかは明らかではない。さらにトランスニストリアの収容所から逃れてきた親戚の人によって、母が1942年の末か43年の始めに、「仕事が出来なくなった (arbeitsunfähig)」¹²⁾のために銃でうなじを撃ちぬかれて殺害されたことを伝えられる。

両親の死は、ツェランの人生と詩作を決定的に変えることになる。「両親が無残に死んでいったのに自分は生き残ってしまったという罪悪感」¹³⁾が彼を憂鬱な人間に変えた。以後、これまで拒否していたユダヤ的なものに関心を示すようになっていく。両親の死を何千年にわたるユダヤ民族の受難の歴史と結びつけたのである。

転々と場所を変えながらの強制労働と、その合間のわずかな時間をぬっての詩作によって1943年は過ぎていく。

1944年

1942年9月から43年2月までのスターリングラードの会戦での大敗北はルーマニアにとって決定的な転換点となった。以来ルーマニア軍は消極的になり、国の内外で戦争への抵抗運動が組織されていく。1943年9月には休戦をめぐってソ連と折衝が行われた。1944年春のイギリス、アメリカ、ソ連の各大使との会見では、三国はルーマニアに、対ソ戦の停止と対独宣戦布告、ルーマニア領の自由な通過および賠償を求め、一方トランシルヴァニア北部は返還すると約束した。しかしこの間元帥になっていたアントネスクは、この提案を拒否する。ソ連軍はドニエートル川に向かって進撃を開始する。

8月23日、ミハイ国王と側近の軍人、および共産党を始めとする諸政党によるクーデターが行われる。独裁者アントネスクは国王によって解任され、ただちに逮捕される。国王は引き続きラジオを通して、国民統合政府の樹立、連合国に対する戦争終結と連合国側の停戦条件受諾の声明を発表する。8月25日、ルーマニアはドイツとハンガリーに対して宣戦を布告する。9月にはソ連との間で休戦協定が結ばれる。この協定では、戦争賠償金を支払いなどのほかに、トランシルヴァニア北部のルーマニアへの返還と引き替えにベッサラビアとプロヴィナ北部のソ連への譲渡が定められていた。最終的にルーマニア全土が解放されたのは、10月26日のことである。

チェルノヴィッツではどのような状況だったのだろうか。

この年の2月にタバレスチエの強制労働収容所が解体され、ツェランはチェルノヴィッツ

に戻ってきた。彼は祖父の家に身を寄せた。4月、ソ連軍が戦わずして市内に入ってくる。しかし、それは解放と呼べるものではなかった。ブコヴィナの住民は、ユダヤ人であろうと例外なく手厳しく扱われた。破壊された建物の撤去、民間の文書館の解体、空き家からの本の運び出しなどのために再び強制労働が課せられた。戦争はまだ続いていたのでソ連軍は兵を招集し始めた。ツェランは精神病院の医療助手になって兵役を免れた。トランスニストリアから生き残った人々の帰還も始まった。戻ってきた者は多くはなかった。ツェランは、帰ってきた親戚と一緒に、ようやく取り戻すことができた両親の家に移った。

ブコヴィナの詩人でツェランより14歳年長のアルフレート・キットナー（1906-1991）と、ツェランのかつての同級生でやはり詩を書いていたイマヌエル・ヴァイスグラース（1920-1979）も追放から戻ってきた。彼らは家族ともどもトランスニストリアの収容所に送られていたのである。彼らと再会したツェランは、彼らが語る収容所での恐怖や、非人間的な生活の様子などを押し黙って聞いていた。ツェランにとってとりわけ大きなショックだったのは、ヴァイスグラースがトランスニストリアで年老いた母を救うことができたと言ったことである。ツェランは、自分も両親と一緒にだっただらひょっとして彼らを助けることができたかもしれないと思い、激しい良心の呵責を感じたのである。エメリッヒが言うように、「生き残った罪。それは本来その人の罪ではなく、ナチスの罪」¹⁴⁾である。にもかかわらず、生き残った者に生涯消えることのない罪の意識を残してしまうのである。

精神病院の医療助手として患者を移送してキエフに来ていたツェランがそこから友人のエーリッヒ・アインホルンに出した7月1日付け手紙は、両親の死がいかに深い傷を彼に与えているかを示す痛ましい手紙である。

君の両親は元気だよ、エーリッヒ。ぼくはここに来る前に君の両親と話したんだ。これは大したことだ、エーリッヒ。どれくらい大したことだか君にはわからないかもしれない。

ぼくの両親はドイツ人によって射殺されたんだ。プーク河畔のクラスノポルカで。エーリッヒ、ああエーリッヒ。……君は多くのことを見てきたろう。ぼくは屈辱ばかり体験した。それと空虚、無限の空虚を。¹⁵⁾

ツェランが「死のフーガ」を書いたのはこのころのことである。¹⁶⁾

おわりに

両親を助けることができなかったことは、1970年の自殺に至るまでツェランのトラウマであり続けた。自分の両親が連れ去られた夜について、彼が1960年になって女友達らに語ったことが伝えられている。

パウルは、自分のもっとも重い罪は裏切りだと言いました。彼の眼からは涙があふれました。彼の話によると、ある日ナチスがやってきて彼と両親を逮捕したそうです。それは1942年のことでした。彼らは強制収容所への連れて行かれました。有刺鉄線によって彼らは引き離されました。それでパウルは有刺鉄線から手を伸ばし、父の手をつかみました。監視人がそれを見つけ、パウルの手を激しく噛みついたのです。「それでぼくはパパの

手を離したんだ。そうなんだ、ぼくはその手を離して逃げ出したんだ。」¹⁷⁾

ツェランが両親とともにナチスに逮捕され強制収容所に連れて行かれたという事実はないし、また監視人が手に噛みつくというのも奇妙である。これは実際にあった出来事ではなく、精神に変調をきたしていた時期¹⁸⁾のツェランの夢か幻想であると思われる。しかしここからは、ツェランが自分が逃げ出すことで両親を裏切ったという思いを心の奥底で抱いていたこと、それが両親との最後の別れから18年のちになっても彼を苦しめ続けていたことがわかる。

テオドール・アドルノ(1903-1969)が、「アウシュヴィッツの後に詩を書くことは野蛮だ」¹⁹⁾と述べたことはよく知られている。アドルノがここで詩という言葉で想定しているのは現実を美化する詩のことであろうが、ツェランの「死のフーガ」は、アウシュヴィッツを告発するもっとも仮借ない詩として、アドルノのテーゼへの最大の反証となったと言われる。しかし、「死のフーガ」は単なる批判の詩であるだけではない。そこにはツェランの個人的苦悩もまた深く刻み込まれている。それは、「裏切り」という「もっとも重い罪」を背負ったツェランが、詩という形式を通じて、両親が日々さらされていた強制収容所の恐怖を迫体験する試みでもあったのである。「夜明けの黒いミルク私たちはそれを晩に飲む」で始まる詩における「私たち」という複数の一人称はそのことを示しているだろう。

ツェランの個人的体験は、二十世紀における人間の最大の蛮行によってもたらされた無数の悲惨な体験のひとつにすぎないかもしれない。しかし、その個人的な苦悩が「死のフーガ」として文学的に形象化されることによって、それは単なる個人的な領域を超え、「私たち」全体が共有すべき普遍的苦悩の表現となったのである。

註

- 1) 「大分大学教育福祉科学部研究紀要」第25巻、第1号、2003年、73-86頁。
- 2) Chalfen, Israel : Paul Celan. Eine Biographie seiner Jugend. Frankfurt a. M.1979. 邦訳：イスラエル・ハルフェン著（相原勝・北彰訳）『パウル・ツェラーン——若き日の伝記』未来社 1996。なお訳者による詳細な訳注と年譜が非常に参考になった。
- 3) Paul Celan. Gesammelte Werke in sieben Bänden, hrsg. von Beda Allemann und Stefan Reichert unter Mitwirkung von Rolf Bücher. Frankfurt a. M.2000, Bd.1, S.283.
- 4) ルーマニアは第一次大戦後、ヴェルサイユで開催された講和会議、オーストリアとのサンジェルマン条約、ハンガリーとのトリアノン条約により、ベッサラビア、ブコヴィナ、トランシルバニアなどを獲得し、領土を戦前の二倍以上に拡大した。
- 5) ベッサラビアは、ルーマニアとロシア・ソ連との間で長らく領有をめぐる争いが続いていた地域。
- 6) Chalfen, S.115.
- 7) ルート・ラックナーの証言。Chalfen, S.119.
- 8) Chalfen, S.120.
- 9) Chalfen, S.125.
- 10) Felstiner, John : Paul Celan. Eine Biographie. Deutsch von Holger Fliessbach. München 2000, S.40.
- 11) ebd.
- 12) Felstiner, S.42.

- 13) Chalfen, S.128f.
- 14) Emmerich, Wolfgang : Paul Celan. Reinbek bei Hamburg 2001, S.47.
- 15) Emmerich, S.46.
- 16) アルフレート・キットナーは次のように証言している。「それから（筆者注：1944年の晩春に収容所から戻ってツェランと会ってから）ほどなくしてのことだったと思うが、ある午前のこと彼（筆者注：ツェラン）は私に、ジーベンビュルガー通りにあるチェルノヴィッツの大聖堂の鉄柵の前で、少し前に書き上げた「死のフーガ」を朗読してくれた。」(Celan, Paul : Todesfuge mit einem Kommentar von Theo Buck. Aachen 1999, S. 46)
- 17) Felstiner, S. 39
- 18) ツェランは、1960年から70年の自殺までの10年間は、剽窃の誹謗文書が発表されたこと、ネオナチへの極度の不安、生き残ったことの罪の意識などによって情緒不安定で、精神病院への入退院を繰り返した。
- 19) Theodor W. Adorno, Gesammelte Schriften, Bd.10・1, Frankfurt a. M.1977, S.30.

その他の参考文献

森 治 著『ツェラン』清水書院 1996

ヘルムート・ベッティガー著（鈴木美紀訳）『パウル・ツェランの場所』法政大学出版局 1999

ジョルジュ・カステラン著（萩原直訳）『ルーマニア史』白水社（文庫クセジュ）1993

Celan bis zur Entstehung der "Todesfuge"

SASAKI Hiroyasu